

千葉県フリーター2007

—アンケート調査報告(2007年5月～8月)—

星 真 実

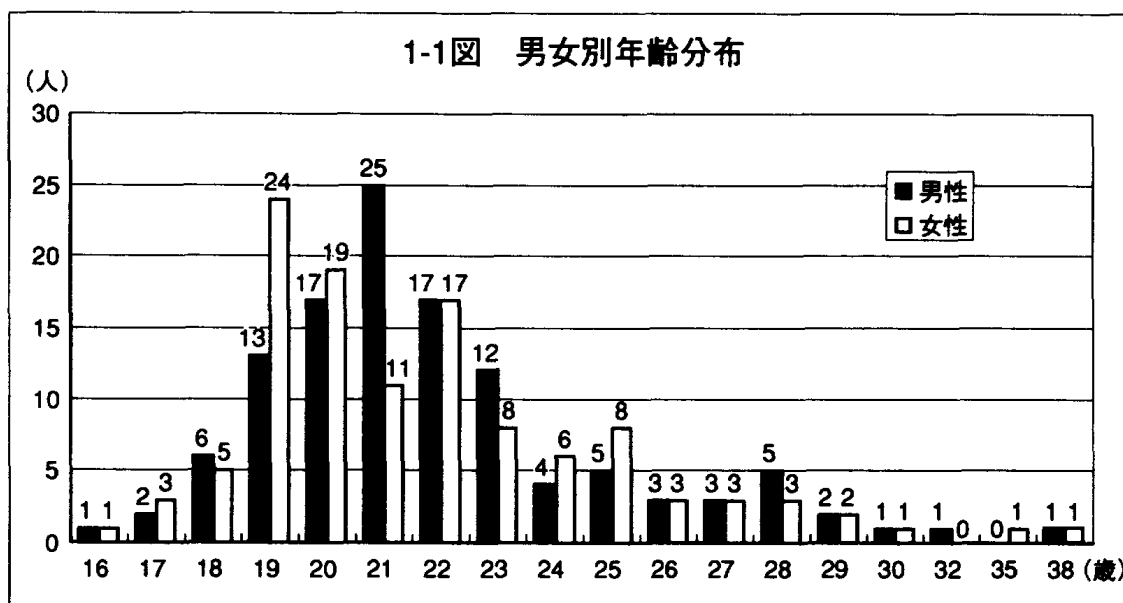
はじめに

本論文は、第3回(隔年実施)¹⁾を迎えた「フリーターのみなさんへのアンケート」調査の結果報告である。2007<平成19>年5月24日から8月23日の3ヵ月間に亘り、過年度調査同様、千葉県内の各駅周辺²⁾で街頭アンケートを実施した³⁾。地域調査の一環として調査対象者は千葉県内に限定しつつ、労働移動という観点から、居住地か勤務地(=アルバイト先)の一方が東京都・他県であっても、もう一方が千葉県内である場合は有効とした。今回の有効回答は、234枚であった(内訳は男性118人、女性116人)⁴⁾。可能な限り2002年度、2005年度調査との比較を交えながら、以下にその集計・分析結果を報告したい⁵⁾。

1. 基礎データ

1-1. 年齢分布

年齢(有効回答234人)は、実数最多年齢に2歳の男女差が出たものの(男性21歳、女性19歳)、各々を頂点とするほぼ正規分布で、18歳から25歳が全体の84.19%を占める。平均年齢は、21.9歳(男性22.0歳、女性21.8歳)。過年度調査に比して、年齢の構成や分布上大きな変化はなかった。男性1人、女性2人が35歳以上であるが、フリーター対象年齢(15～34歳)時から現在のアルバイト・パートを継続しており、以下の項目に関わっては有効回答として加算した。



1-2. 居住地域・勤務地域

千葉県内27市町⁶⁾に跨りアンケートを回収することが出来た。居住地域（有効回答234人）別に比して勤務地域（有効回答225人）別の減数は、調査時にアルバイトを行っていなかった6人と、派遣で勤務地が一定でない3人の計9人が原因である。地域別回収数では、千葉市が居住地域（65人）・勤務地域（64人）共に群を抜き、次いで船橋市、市川市と、過年度調査との差異はなかった。

1-2表の「居・勤一致」は、居住地市町と勤務地市町（＝アルバイト雇用先）とが同一である人数である。一致率は68.89%で、2005年度（69.68%）より若干他地域への労働力移動が増加した計算になる。もちろん、移動先の多くは近隣地域であるが、特筆すべきは「浦安市」で、県内だけでなく都内・近県からの労働力を吸収し、そのアルバイト先は全て某テーマパークであった。

1-2表 居住地域・勤務地域別アンケート回収数（単位：人）

	旭市	いすみ市	市川市	市原市	浦安市	柏市	木更津市
居住地域	5	3	24	10	4	6	7
勤務地域	4	1	15	10	19	4	5
居・勤一致	4	1	14	8	4	3	4
	九十九里町	佐倉市	山武市	芝山町	匝瑳市	袖ヶ浦市	多古町
居住地域	1	6	7	1	4	1	1
勤務地域	0	2	5	1	3	0	0
居・勤一致	0	2	5	1	2	0	0
	千葉市	銚子市	東金市	習志野市	成田市	船橋市	松戸市
居住地域	65	3	8	9	2	25	2
勤務地域	64	2	9	11	5	35	2
居・勤一致	50	2	6	7	2	20	1
	茂原市	睦沢町	八街市	八千代市	横芝光町	四街道市	
居住地域	1	0	14	11	9	1	
勤務地域	2	1	10	3	8	2	
居・勤一致	1	－	9	2	7	0	
	東京都	埼玉県	神奈川県	茨城県	計		
居住地域	1	2	1	0	234		
勤務地域	1	0	0	1	225		
居・勤一致	0	0	0	－	155		

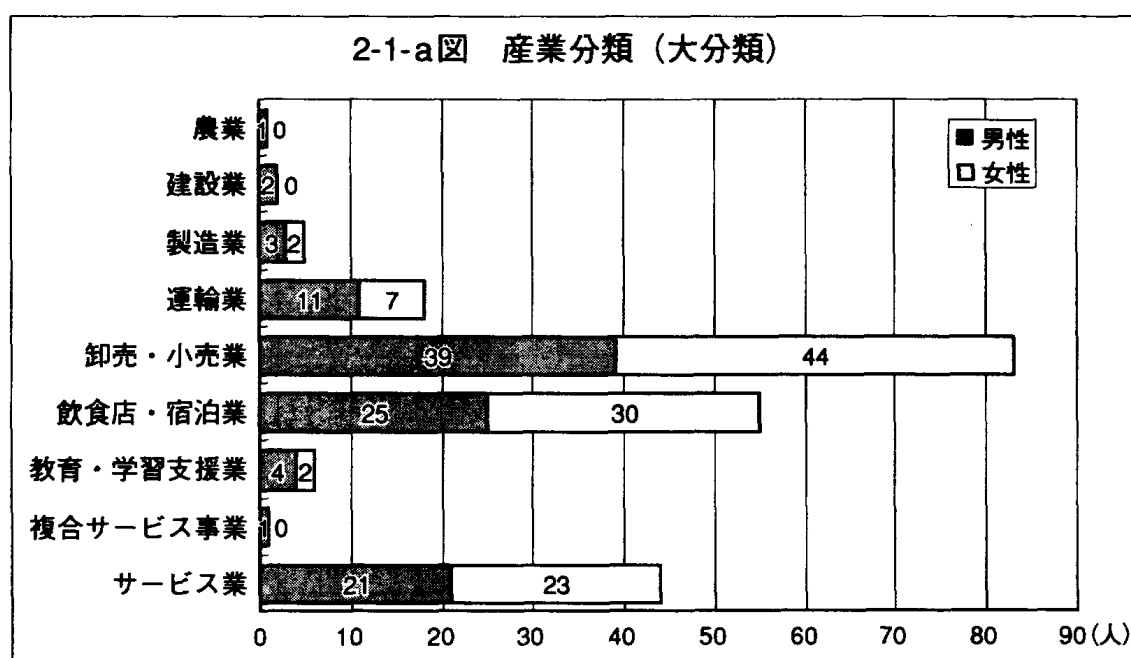
2. 労働に関わるデータ

2-1. アルバイトの種類

「何のアルバイトをしていますか」というアンケート項目に、「サービス業」「飲食店」「製造業」などの産業回答、「ショップ店員」「接客業」「ウェイター」「レジ」などの職業回答から、具体的店名・職種名、詳細な業務内容まで区々であるため、分類可能な母集団⁷⁾を用いて、以下に産業別・職業別での考察を行いたい。

a) 産業分類（有効回答215件）：総務省統計局「日本標準産業分類（平成14年3月改訂）」に基づく大分類では、「卸売・小売業」が83件（38.6%）、「飲食店・宿泊業」が55件（25.58%）、「サービス業」が44件（20.47%）の順で、過年度調査と比べ「飲食店・宿泊業」と「サービス業」が逆順となった（2-1-a表参照）。

また、今回初めて「農業」に1件該当があったが、「林業」「漁業」「鉱業」「不動産業」「金融・保険業」「電気・ガス・熱供給・水道業」「情報通信業」「公務」「医療・福祉」には、男女共に該当がなかった。



今回調査では運送会社3社の御協力でまとまったアンケートを回収出来たことで、「運輸業」の割合も8.37%に達した。それでも、上位3産業の計が84.65%、特に女性では89.81%に達し、第3次産業の枠内に圧倒的偏りを見せた。

参考までに、具体的に記載された店名・職場など184件を、産業分類に即して細目化すれば以下の通り——〔 〕内は〔男性, 女性〕順の該当件数。

2-1-a表 産業分類に占める上位3産業の割合(%)

		卸売・小売業	飲食店・宿泊業	サービス業	計
2002年度	全体	①37.54	③21.32	②30.63	89.49
	男性	①33.33	③19.87	②29.49	82.49
	女性	①41.24	③22.60	②31.64	95.48
2005年度	全体	①37.42	③18.40	②31.29	87.12
	男性	①33.33	③18.63	②33.82	85.78
	女性	①44.26	③18.03	②27.05	89.34
2007年度	全体	①38.60	②25.58	③20.47	84.65
	男性	①36.45	②23.36	③19.63	79.44
	女性	①40.74	②27.78	③21.30	89.81

(注) ○数字は各年度の順位を表す。

- ・ 農業：選果場 [1, 0]。
- ・ 建設業：大工 [1, 0]、土木作業 [1, 0]。
- ・ 製造業：工場 [3, 2]。
- ・ 運輸業：運送会社 [6, 5]、倉庫内作業 [5, 2]
- ・ 卸売・小売業：コンビニエンスストア [12, 2]、テーマパーク [5, 5]、
アパレル・洋服・婦人服 [1, 9]、スーパーマーケット [4, 4]、ガソ
リンスタンド [3, 1]、書店 [2, 1]、100円ショップ [1, 1]、パン屋
[1, 1]、流通センター [1, 1]、アクセサリ販売店 [2, 0]、香水販
売店 [0, 2]、CDショップ [1, 0]、おにぎり屋 [0, 1]、玩具店 [0, 1]、
靴屋 [0, 1]、ケーキ屋 [0, 1]、雑貨屋 [0, 1]、自動車ディーラー
[0, 1]、スポーツ用品店 [1, 0]、中国茶専門店 [0, 1]、ドラッグス
ストア [0, 1]、百貨店 [1, 0]、ペットショップ [0, 1]、ホームセンタ
ー [1, 0]、八百屋 [1, 0]。
- ・ 飲食店・宿泊業：ファミリーレストラン [3, 8]、居酒屋 [2, 6]、焼
肉店 [5, 2]、ファーストフード店 [2, 3]、回転寿司店 [0, 2]、蕎麦

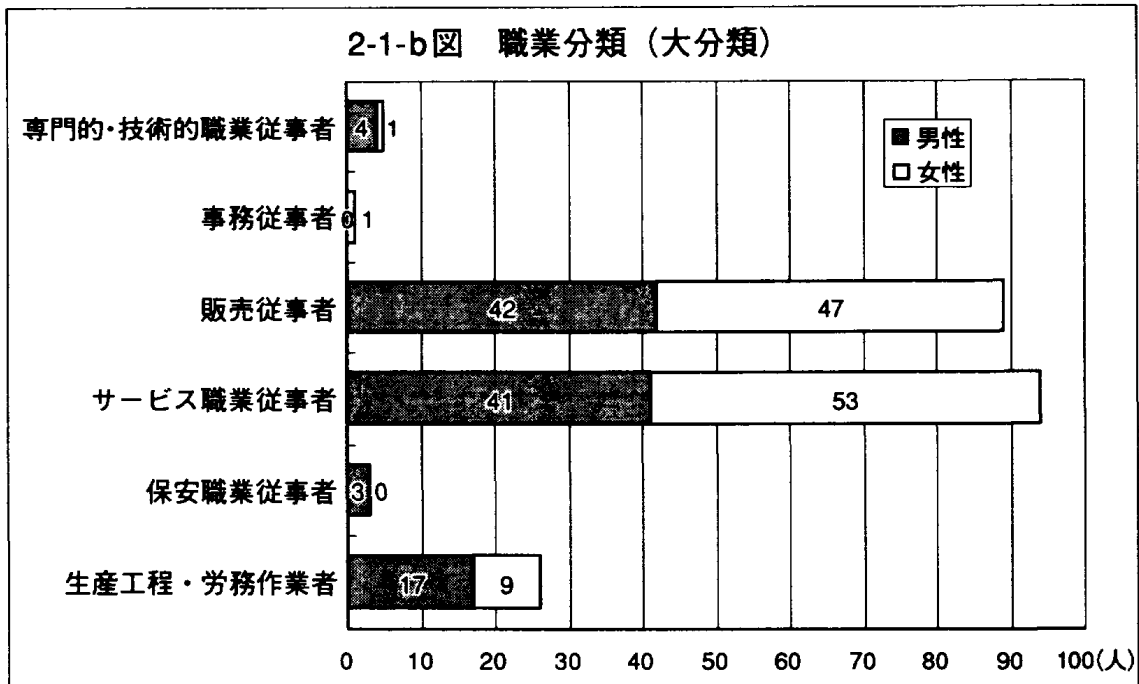
店〔1, 0〕、キャバクラ〔0, 1〕、ホテル〔2, 1〕。

- ・教育・学習支援業：学童保育指導員〔1, 0〕、キャンパスサポーター〔0, 1〕、サッカーのコーチ〔1, 0〕、スポーツインストラクター〔1, 0〕、非常勤講師〔1, 0〕、保育士〔0, 1〕。
- ・複合サービス事業：JA（農協）〔1, 0〕。
- ・サービス業：パチンコホール〔8, 5〕、カラオケボックス〔2, 4〕、漫画喫茶〔2, 3〕、レンタルCD・ビデオ店〔1, 3〕、ゲームセンター〔2, 1〕、警備員〔3, 0〕、チラシ・ビラ配り〔1, 1〕、インターネットカフェ〔1, 0〕、映画館〔0, 1〕、エステサロン〔0, 1〕、整骨院〔0, 1〕。

職場別上位は、コンビニエンスストア14件、パチンコホール13件、運送会社とファミリーレストラン11件、アパレル・洋服・婦人服とテーマパーク10件であった。回答が集中した運送会社以外は、過年度調査同様の上位職場が並ぶ結果となった。

- b) 職業分類（有効回答218件）：総務省統計局「日本標準職業分類（平成9年12月改訂）」に基づく大分類では、「サービス職業従事者」が94件（43.12%）、「販売従事者」が89件（40.83%）の順で、過年度調査と同位であった（2-1-b表参照）。「管理的職業従事者」「農林漁業作業者」「運輸・通信従事者」には、男女共に該当はなかった。

男性では、上位2職業が僅か1件差で逆順となり、「生産工程・労務作業者」にも17件（15.89%）見受けられるという特徴が出た。だが、産業別で集中した3産業の1つ「飲食店・宿泊業」は、大部分が「サービス職業従事者」の中分類「接客・給仕職業従事者」として、一部が「販売従事者」の中分類「商品販売従事者」として二分化吸収されたため、実に2職業従事者で83.94%（女性では90.1%）に及ぶ過年度同様の結果となった。



2-1-b表 職業分類に占める上位2職業従事者の割合（％）

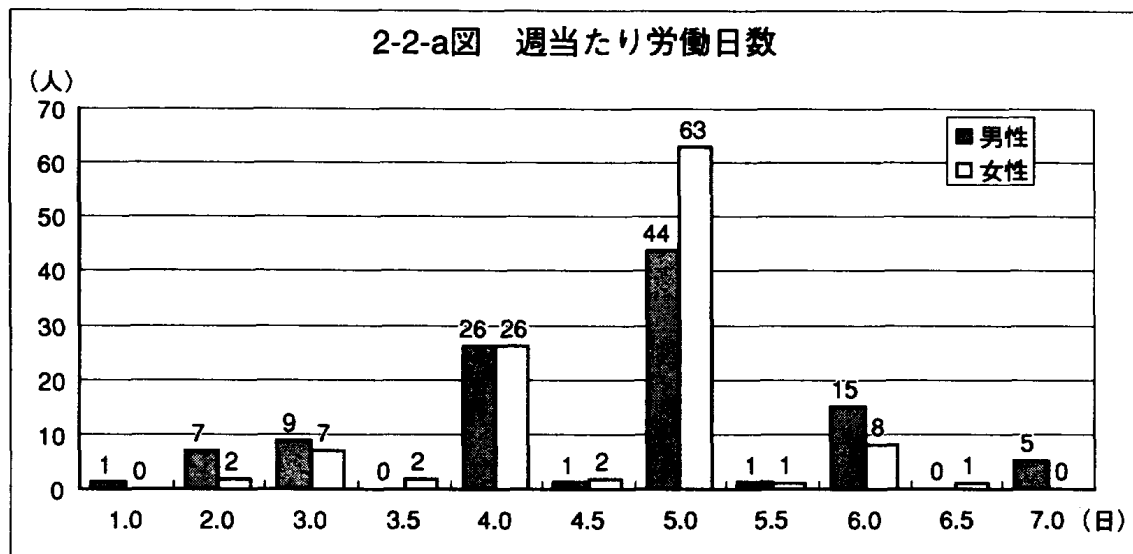
		サービス職業従事者	販売従事者	計
2002年度	全体	①47.94	②39.05	86.98
	男性	①45.89	②33.56	79.45
	女性	①49.70	②43.79	93.49
2005年度	全体	①49.12	②36.18	85.29
	男性	①52.11	②31.92	84.03
	女性	①44.09	②43.31	87.40
2007年度	全体	①43.12	②40.83	83.94
	男性	②38.32	①39.25	77.57
	女性	①47.75	②42.34	90.10

（注）○数字は各年度の順位を表す。

2-2. 労働日数

- a) 労働日数（有効回答221人）は、週当たり平均4.6日（男女共に4.6日）。実数では週5日労働が107人（48.42%）と圧倒的で、次いで4日が52人（23.53%）。4～6日の計が全数の84.62%を占める。逆に、週4日

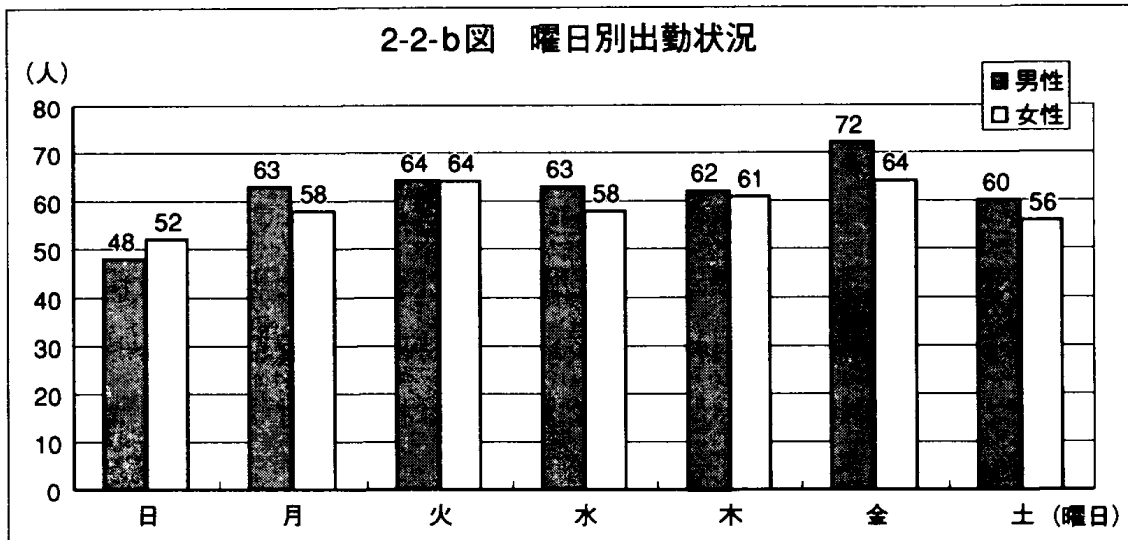
未満を全て併せても12.67%で、過年度調査同様、「週5日労働」が平均的フリーター像であることを裏付ける結果となった。なお、週1日労働の男性のアルバイト先は、サッカーのコーチ（21歳、土曜のみ）。週休0日の男性5人のアルバイト先は、ゲームセンター（20歳）、パチンコホール（21歳）、警備員（22歳）、日給制の日雇労働（22歳）、焼肉店（24歳）であった。



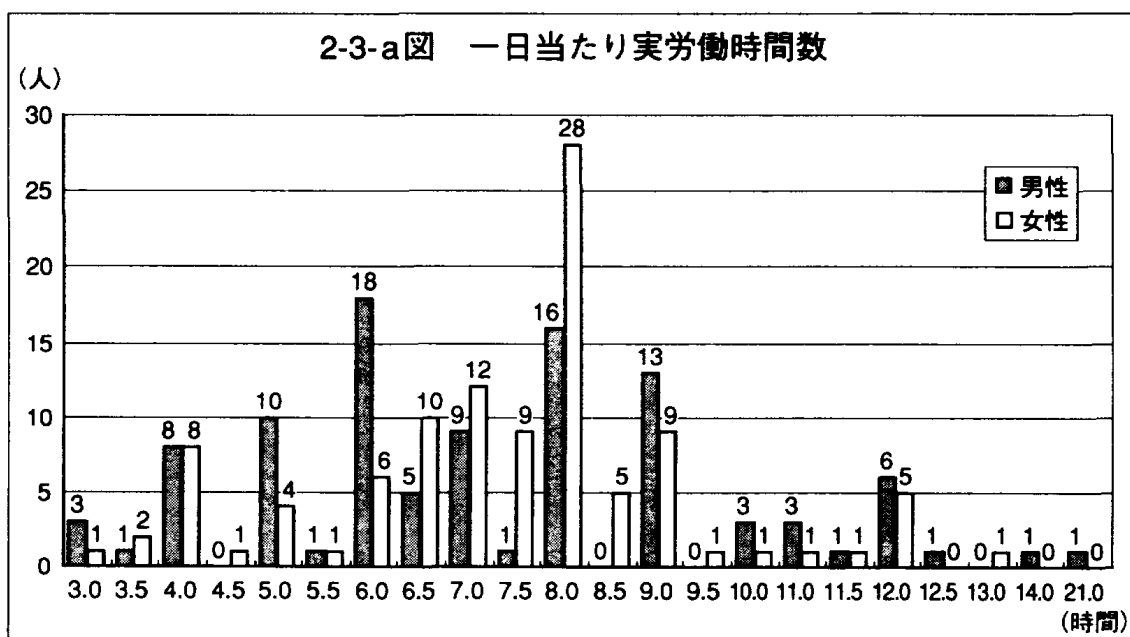
b) 曜日別出勤状況（有効回答156）は、全体的に横並びであるが、金曜75.14%、火曜70.72%、木曜67.96%、月曜・水曜66.85%、土曜64.09%、日曜55.25%の順であった。2005年度調査同様、金曜が1位で、土日が若干少数一特に、日曜は6割を割った。「2-2-a. 労働日数」で見た通り、週7日労働の5人以外は少なくとも隔週1日は休日確保しているとすれば、平日にアルバイトを行い、休日を週休とする傾向がやや見て取れる。

2-3. 労働時間

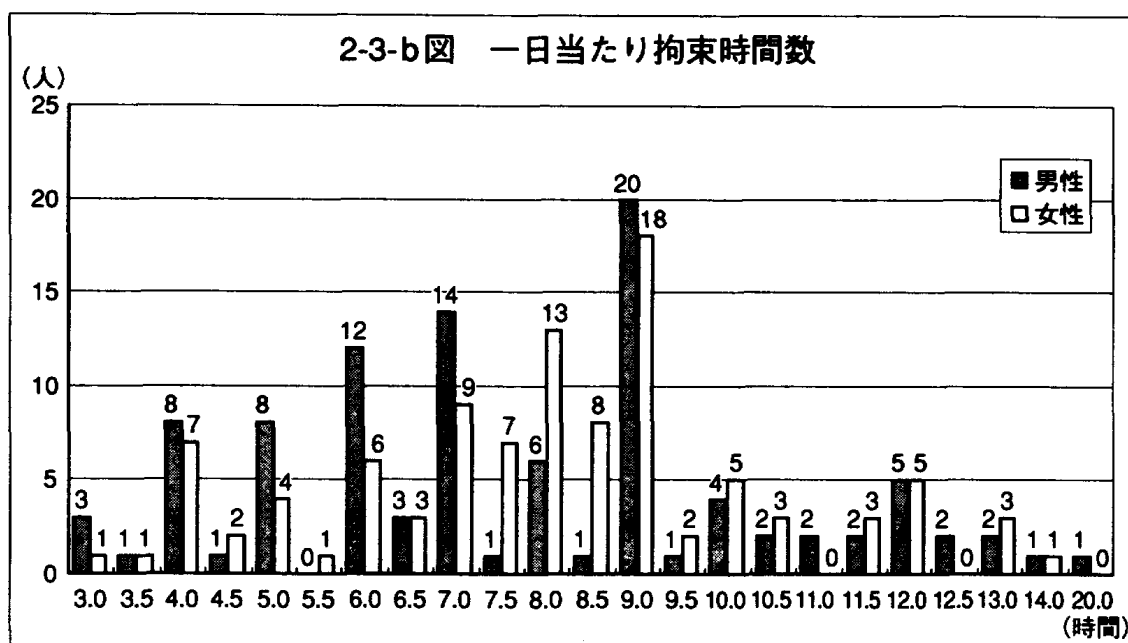
a) 実労働時間（有効回答207人）：一日当たり平均7時間26分（男性7時間26分、女性7時間25分）で、男女差1分と差はないに等しかった。



全数及び女性では、過年度調査同様、「8.0」時間を最多とするほぼ中央分布となったが、男性では「6.0」時間が実数最多であった。但し、1日9時間労働以上割合が男性で28.71%に上り（全数23.19%、女性17.92%）、平均時間では僅差で男女逆転という結果であった。なお、「14.0」時間はカラオケボックス（17歳男性）、「21.0」時間は飲食店12時間とコンビニエンスストア9時間の掛け持ち（21歳男性・週2日翌日休日）であった。

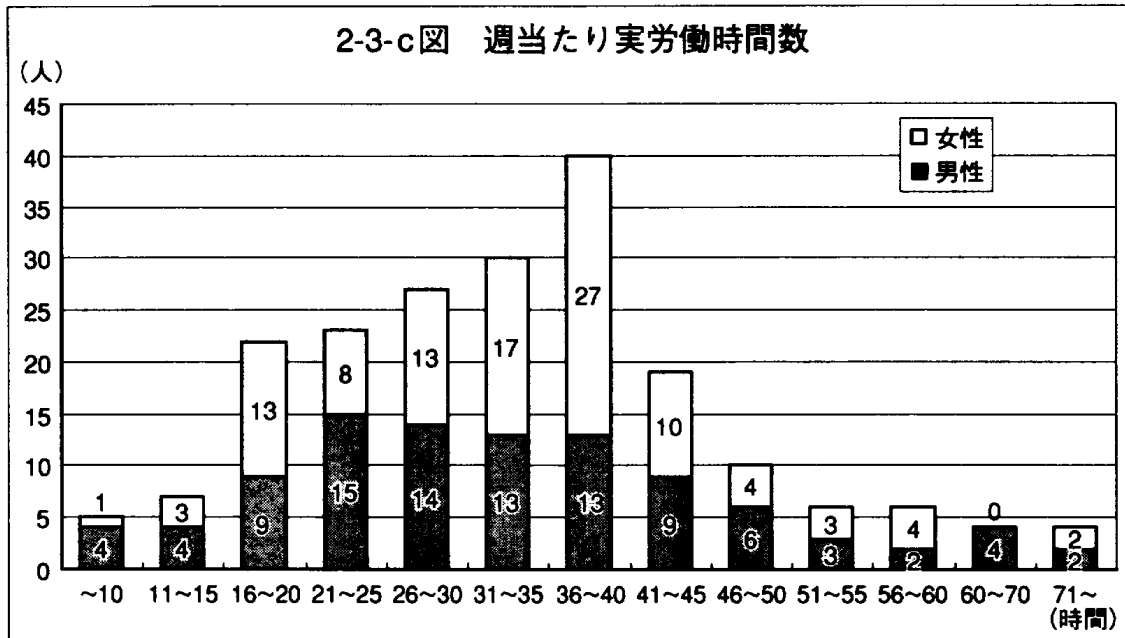


b) 拘束時間（有効回答202人）：一日当たり平均7時間57分と、実労働時間を約30分上回った。特に、実労働時間数での1分差を逆転して、女性が男性を14分上回った（男性7時間50分、女性8時間4分）。実数でも「9.0」時間が38人と最多で、2-3-a図と比べて「1.0」時間右シフトしている。実労働時間に休憩時間が加算された当然の数値であるが、就業前準備・後片付けなどの不払い時間数が賃金に反映さえないだけ、時給制で働くフリーターにとっては拘束に対するより大きな不満を感じるのではなかろうか。



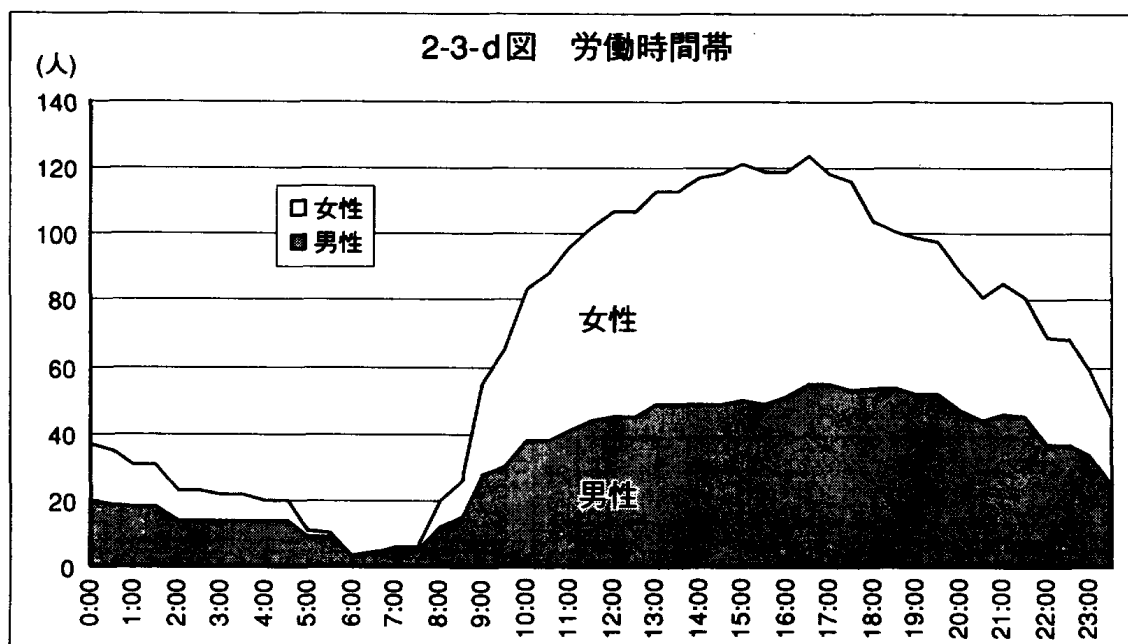
c) 週当たり実労働時間（有効回答203人）：週労働日数×一日当たり実労働時間数で算出した週当たり実労働時間は、平均34時間23分（男性34時間1分、女性34時間43分）で、2005年度調査の平均36時間27分からは週2時間4分の減数となった。実数では週40時間が25人で最多、5時間刻みでも「36～40」時間が40人で最多であるが、法定週労働時間40時間を超過する長時間労働を行っているフリーターは24.14%（49人）と、2005年度調査（32.26%）を大きく下回った。

最低値は6時間（20歳男性・コンビニエンスストア・2日×3時間）、
最高値は84時間（21歳・パチンコホール・7日×12時間）であった。



d) 労働時間帯（有効回答202人）：2-3-d図は、「出勤時間～退勤時間」表記を基に、30分毎の労働時間を全数積み上げた図である。過年度同様の線形を描きながら、男性では16:30～17:30の55人、女性では15:00～15:30の71人をピークに、全体としては日勤の終了時間と夕方開始アルバイト（居酒屋、コンビニエンスストア、パチンコホールの遅番、遊興飲食店など）への入り時間が重なる16:30～17:00の124人がピークとなった。全数としてのフリーターが、第3次産業の労働現場（「2-1-a. 産業分類」参照）を24時間に亘り担っている現実、過年度調査結果と同様であった。なお、最少人数は朝6:00～6:30の3人で、特に女性の6:00～7:00の時間帯は0人であった。

以上の結果から、実数では「1日実働8時間・拘束9時間」の標準労働日、「週5日・40時間」の法定労働時間通りの労働を行い、その上「平日」



「日勤」が多数を占める現況であり、過年度調査同様、フリーターが少なくとも時間的には「フリー」ではないことを裏付けたと言えよう。

2-4. 賃金

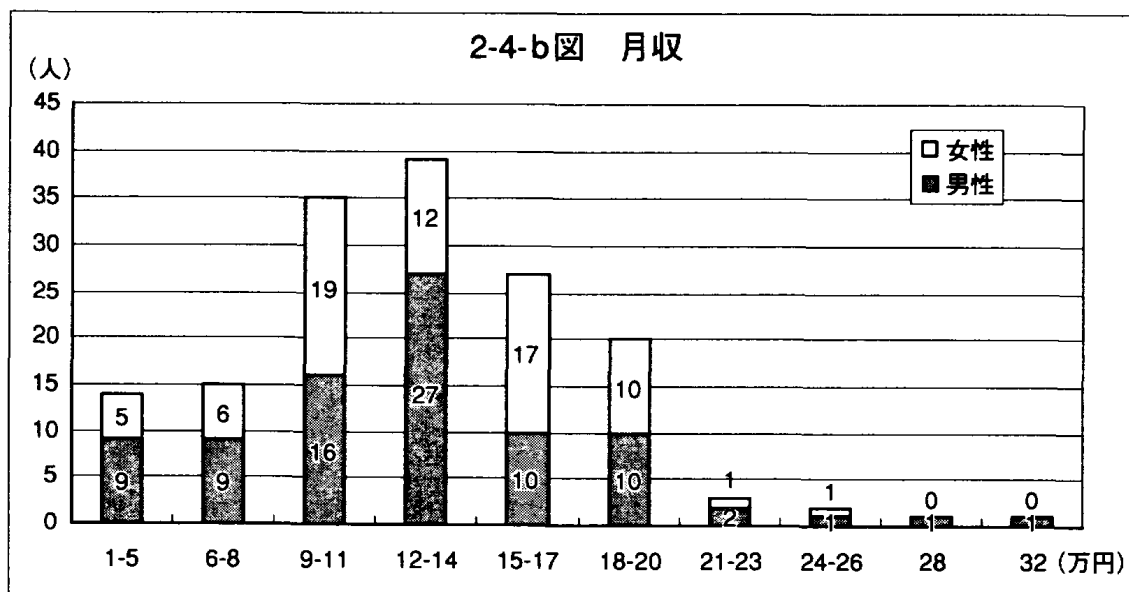
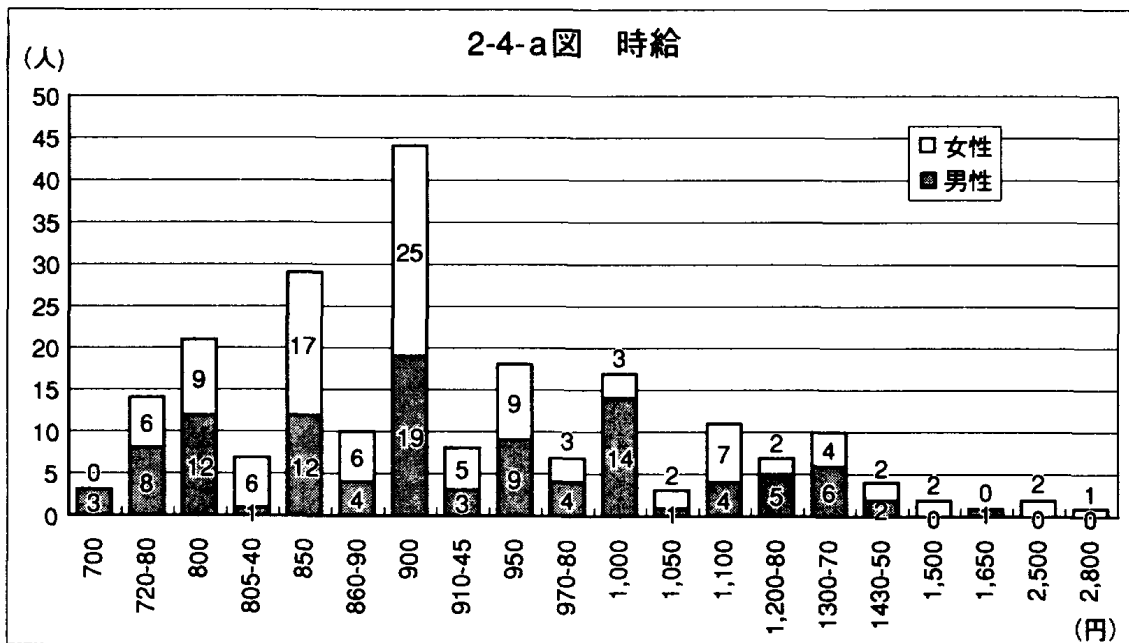
- a) 時給（複数回答219件⁸⁾）：平均時給は、全体967.71円、男性949.21円、女性985.72円であった。男女共に「900」円が最多で、過年度調査に比して男性に大きな差異はないが、女性の時給額が急増した（2002年度927.52円、2005年度930.89円）。

調査時の千葉県地域別最低賃金は687円で問題ないが、2007年10月以降は706円のため、700円の男性3人（18歳・流通センター、19歳・レストラン接客、20歳・コンビニエンスストア）は、賃上げがなければ現行最賃制違反の可能性がある。なお、最高額2,800円は19歳女性で職種はキャバクラ接客、男性の最高額は1,650円で22歳・肉体労働であった。

- b) 月収（有効回答157人）：平均月収は、全体127,217円、男性126,256

円、女性128,380円であった。平均値の男女差は殆どないが、実数では男性最多が「12-14」万円（27人）に対し、女性最多は「9-11」万円（19人）であった。月収20万円以下が95.54%という実態を見れば、「若い頃はフリーターの方が稼げる」という俗説は幻想と言わざるを得ない。

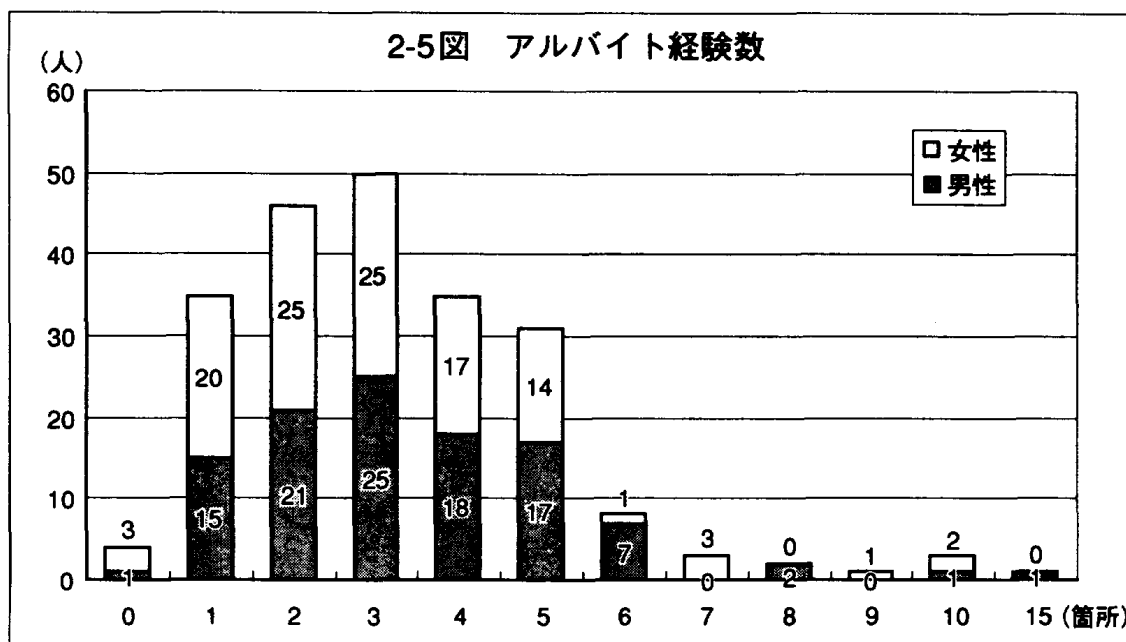
最少月収は1.8万円（20歳男性・コンビニエンスストア・時給700



円・2日×3時間)、最多月収は32万円(21歳男性・パチンコホール・時給1,300円・7日×12時間)。

2-5. アルバイト経験数

これまでのアルバイト経験数(有効回答219人)は、3箇所が22.83%と最も多く、全体平均でも3.3箇所(男性3.4箇所、女性3.1箇所)となった。全体平均で見ると、2002年度4.3箇所、2005年度4.0箇所に比して、経験数が1箇所減少した。最多は23歳男性の15箇所、次いで19歳男性、20歳女性、35歳女性の10箇所であった。

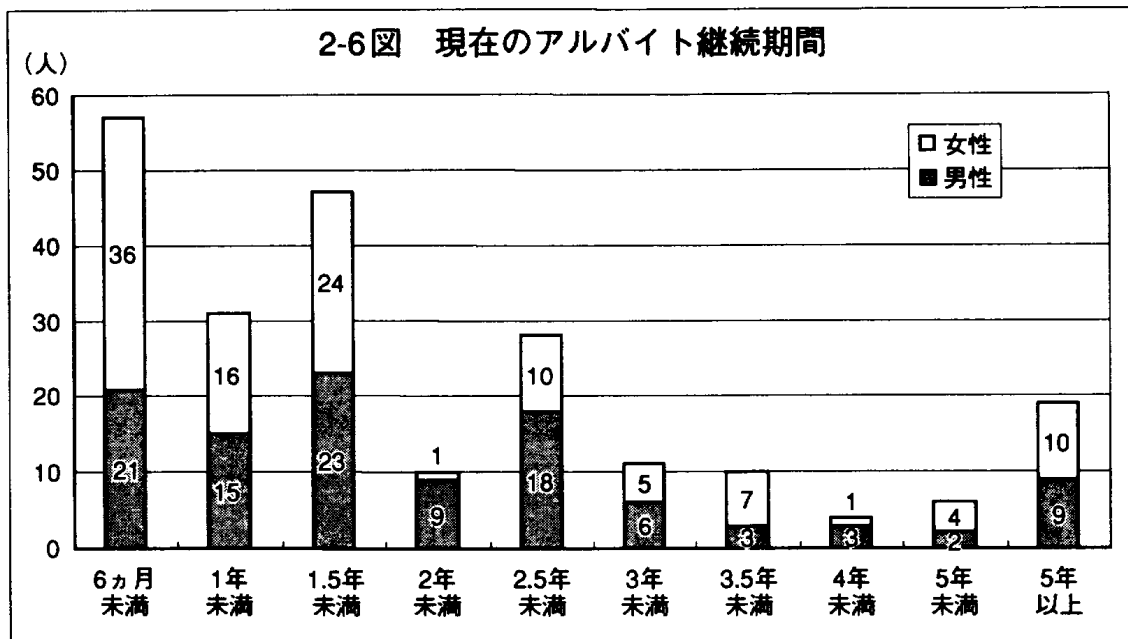


2-6. アルバイト継続期間

現在のアルバイト継続期間(複数回答223件)を半年毎に区切ると、6ヵ月未満の短期が依然25.56%と最多ではあるが、平均継続期間は全体1年9ヵ月(21.1ヵ月)、男性1年9ヵ月(21.6ヵ月)、女性1年8ヵ月(20.6ヵ月)となった。全体平均で見ると、2002年度調査(12.7ヵ月)より約8ヵ月、2005年度調査(18.1ヵ月)より約3ヵ月延びる結果となった。[2-5.

アルバイト経験数」が過年度調査の4箇所から3箇所に減少したことも合わせ、1つの職場でのアルバイト継続期間は、調査回数を増す毎に長期化傾向となっている。

最長は10年1ヵ月（35歳女性・サービス業）だが、フリーター定義年齢の範囲では10年（29歳男性・接客業）が実質最長となろう。



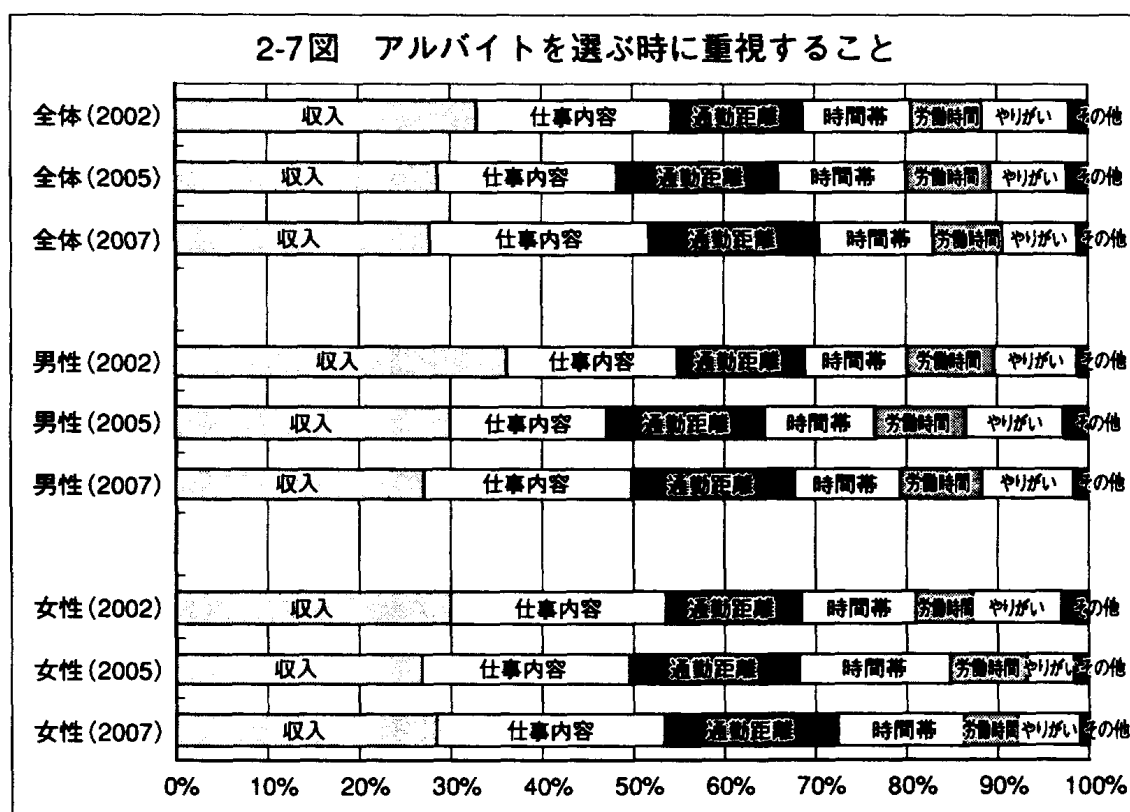
2-7. アルバイト選択基準

アルバイトを選ぶ時に重視すること（複数回答445件、回答者実数226人）は、1位が「収入」（124件、54.87%）、2位が「仕事内容」（106件、46.9%）という順位は、過年度調査と変わらないが、男性の「収入」減（2002年度67.11%→2005年度53.55%→2007年度48.65%—以下年度同順）と「仕事内容」大幅増（34.87%→30.81%→40.54%）、女性の「仕事内容」大幅増（47.06%→44.19%→53.04%）により、相対的に「収入」重視が減少したように見える結果となった。但し、女性の「収入」大幅増（47.06%→44.19%→60.87%）により、順位に変動はなかった。

3位の「通勤距離」増（27.95%→32.94%→36.73%）は、女性の「通勤

距離」増（30%→36.43%→40.87%）に応じた形で、過年度調査に比べ上位3項目の重視傾向がより顕著となった。

「その他」は、「人間関係」3人（19歳男性・レストラン、19歳女性・ファーストフード店、20歳男性・ネットカフェ）、「保険・年金」（22歳女性・テーマパーク）、「適当」（19歳男性・飲食店）の計5人であった。

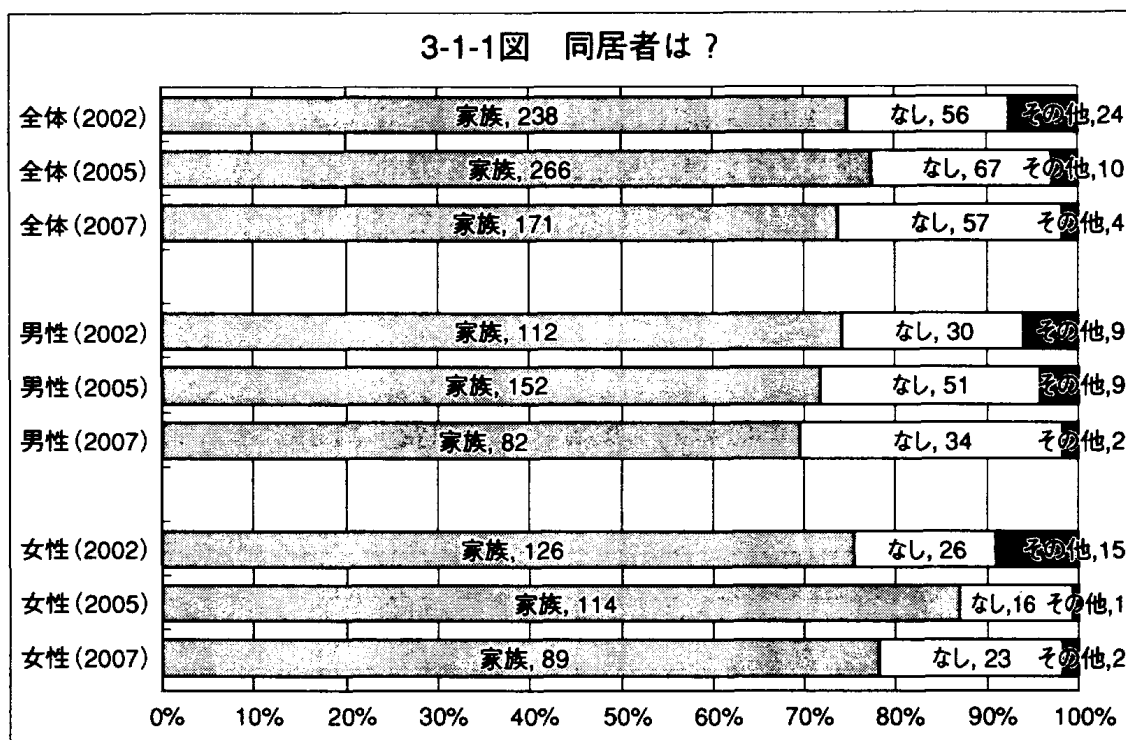


3. 生活に関わるデータ

3-1. 同居率

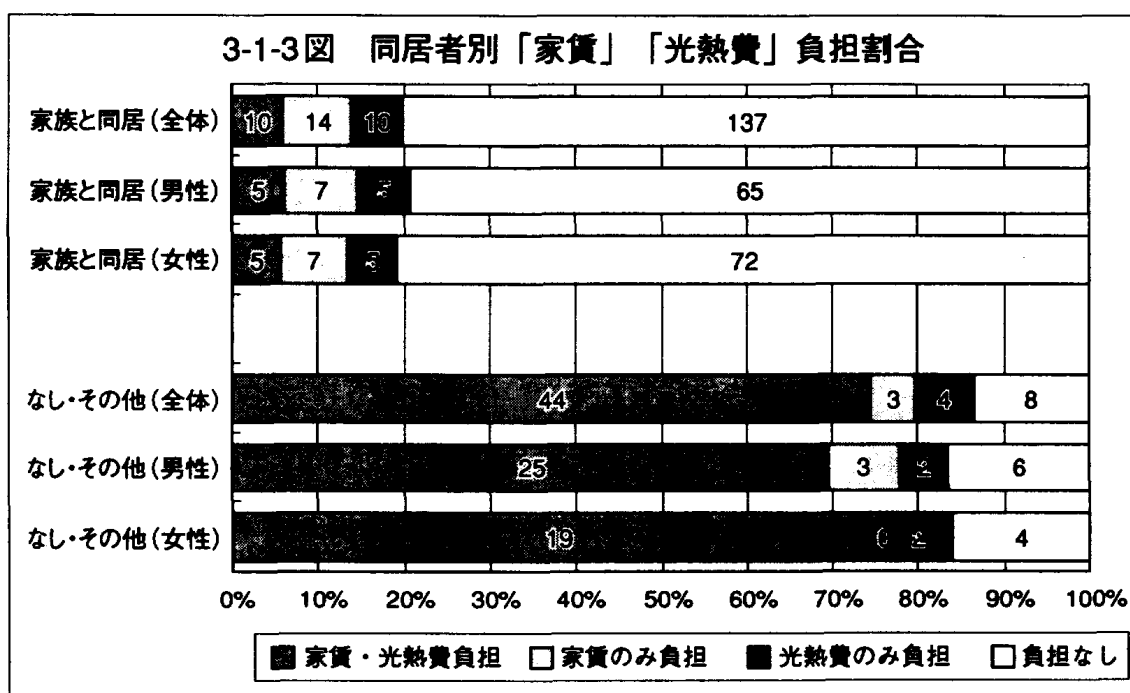
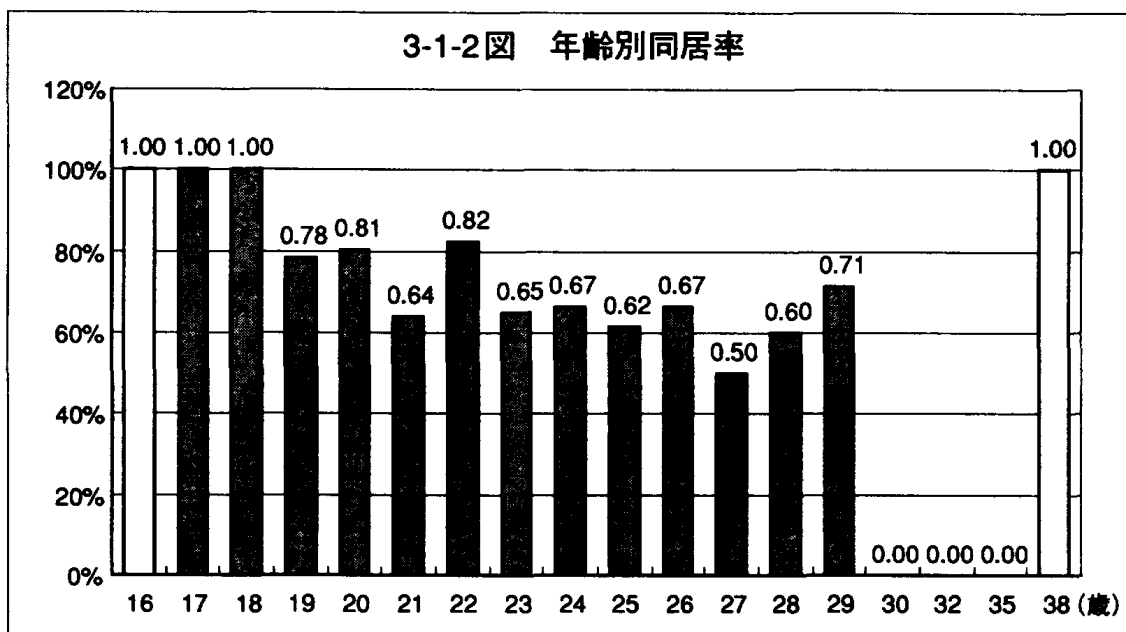
同居者（有効回答232人）は、女性の「家族と同居」率が前回比で減少（2002年度75.45%→2005年度87.02%→2007年度78.07%—以下年度同順）したため、全数の「家族と同居」率も2002年度並に下がった（74.84%→77.55%→73.71%）。その反面、一人暮らしと推定される「同居者なし」が、

全数で約4人に1人まで増加した（17.61%→19.53%→24.57%）。それでも、フリーターの約4人に3人が親元で暮らしているという数値は大きかろう。「その他」は、「恋人・彼氏」2人（24歳女性、25歳女性）、「同居人」（26歳男性）、「友人」（27歳男性）の計4人。



3-1-2図は、「家族と同居」割合を年齢別に並べたものである。母集団2人以下（1-1図参照、白抜き棒グラフ部分）を除けば、年齢が上がるにつれて同居率が下がる傾向が一応は見て取れる。「18」歳までの100%同居率は高校卒業まで親元で、「19」歳からの低下はフリーターへ移行する際に約2割が「一人暮らし」を決断するためと推測出来る。それでも、両親へのパラサイト傾向は、6割以上を堅持したまま一人とその家族が望む、望まざるに関わらず—20代後半まで続いている。

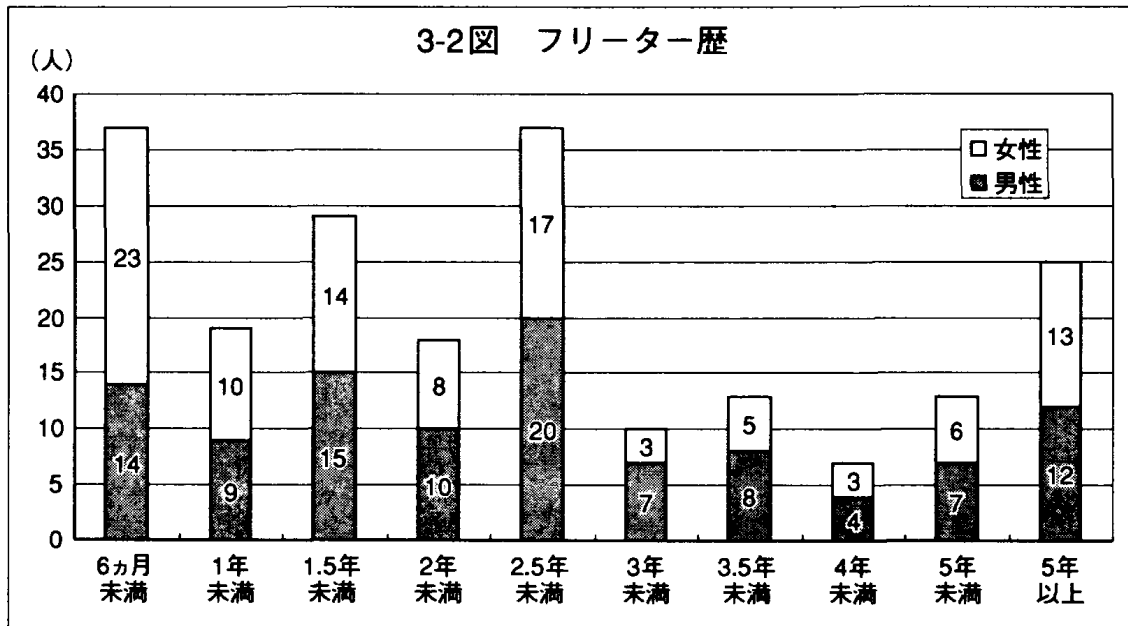
3-1-3図の通り、「同居者なし・その他」の計では、「家賃・光熱費負担」は74.58%、「家賃」「光熱費」のいずれかを負担している件数を合わせると86.44%に達する。



だが、「家族と同居」では、「負担なし」が80.12%という余りに対照的な結果となった。「2-4-b. 月収」で見た月々約12万7千円では、「家賃」「光熱費」を負担して自立した生活を営むことは困難だと推測出来るが、両親の元にパラサイトし続けて、家賃も光熱費も家に納めないフリーターは、依然として全数の約6割（59.57%）を占めている（2005年度67.06%）。

3-2. フリーター歴

フリーター歴（有効回答208人）は、「6ヵ月未満」が35人と最多、次いで2年以上「2.5年未満」が34人であった。2005年度調査同様、調査時期を5月から8月に設定したため、4月卒業+〇年と1～3ヵ月単位の回答が多く、「〇.5年未満」のグラフが高くなる結果となった。平均フリーター歴は、全体2年3ヵ月（27.8ヵ月）、男性2年4ヵ月（28.3ヵ月）、女性2年3ヵ月（27.3ヵ月）。2005年度の2年7ヵ月（31.1ヵ月）よりも平均で3.3ヵ月短期化した。が、「5年以上」の割合は12.02%に増加し（2005年度11.1%）、フリーター歴の延長傾向が推測される。

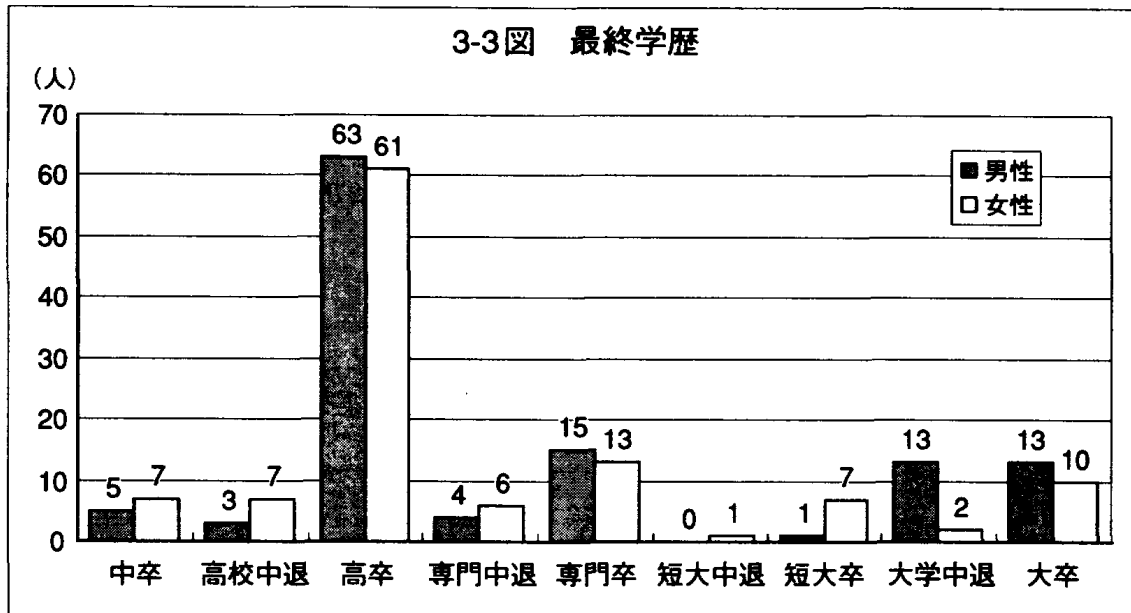


なお、フリーター歴最長は、35歳女性の15年。最終学歴が「専門卒」であることから、20歳で学卒後即フリーターになった実情が伺える一定義上は、「フリーター」の呼称を35歳以上に用いることは不適ではあるが。

3-3. 最終学歴

最終学歴（有効回答231人）は、「高卒」が124人と圧倒的多数で、昨年度に比して増加した（2002年度48.18%→2005年度51.42%→2007年度

53.68%—以下年度同順)。男性で増加(40.13%→50.23%→53.85%)、女性でも微増(54.91%→53.38%→53.51%)したため、全体としては過去最高値となった。「大卒」フリーターも10%と、1割台に戻った(2002年度11.52%、2005年度9.66%)。



3-4. 収入の使い道

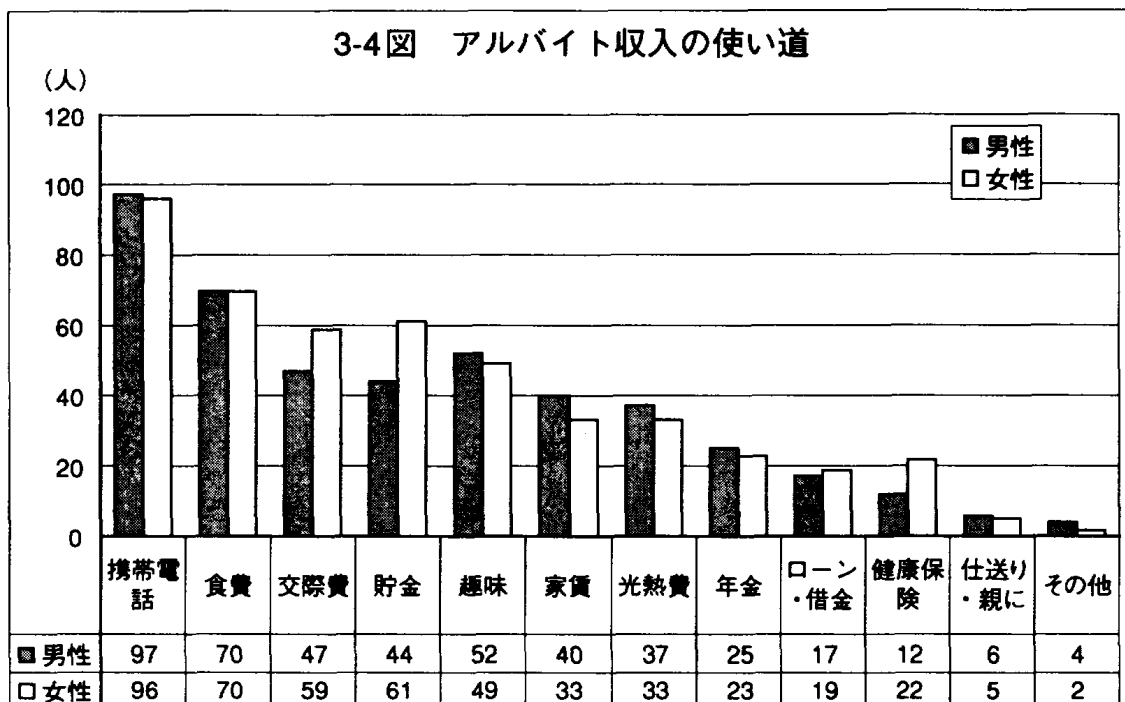
アルバイト収入の使い道(複数回答923件、回答者実数229人)は、1位が「携帯電話」(84.28%)、2位が「食費」(61.14%)、3位が「交際費」(46.29%)、4位が「貯金」(45.85%)、5位が「趣味」(44.1%)となった。「携帯電話」は3回連続1位となっただけでなく、2002年度76.78%、2005年度75.29%から1割近く上昇した(特に、女性の85.71%)。

4位の「貯金」は、2002年度36.84%、2005年度41.95%と元々高い数値ではあったが、女性では実に半数を超えて(54.46%)収入を「貯金」に回している結果となった。その反面、女性の「仕送り・親に」が4.46%止まりなのは、残念な結果ではあるが。

4位の「趣味」は、該当者101件中51件に内容記載があった。1位「ギャンブル(パチンコ、パチスロなど)」11件、2位「ファッション(服な

ど)」7件、3位「CD・音楽」と「車・バイク（維持費）」各6件、5位「買い物」5件、6位「コンサート・ライブ」4件、7位「ダンス」と「本」各2件、その他「ゲーム」「カラオケ」「ダーツ」「スノボー」「写真」「釣り」「酒」「習い事」であった。

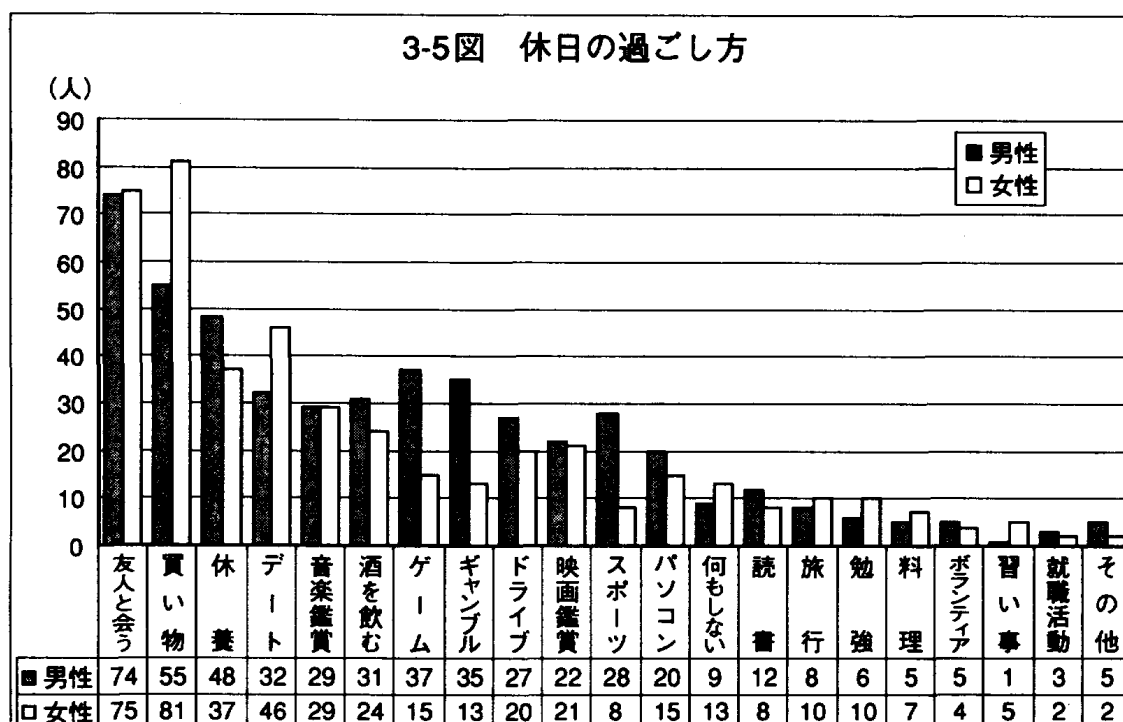
「その他」は、「学費返済」（23歳男性）、無記入3件の計4件であった。



3-5. 休日の過ごし方

休日の過ごし方（複数回答937件、回答者実数231人）は、1位が「友人と会う」（64.5%）、2位が「買い物」（58.87%）、3位が「休養」（36.8%）、4位が「デート」（33.77%）で、順位は若干前後するが、上位項目に過年度調査との差異はなかった。2002年度3位（33.75%）から2005年度4位（28.86%）と下がった「休養」が今回3位に返り咲き、実に男性の41.03%を占めた。この点が、休日に他の活動が出来ない程に労働・生活条件が過酷であること＝「フリー」ではない現実を雄弁に語っているように思われる。

左から右へ全体数の多い項目順に並べた3-5図を見ての通り、女性は順



位が若干前後するものの、「買い物」(71.05%)、「友人と会う」(65.79%)、「デート」(40.35%)、「休養」(32.46%)の順で、上位項目の範囲内に収まっている。男性は、上位3位まで全体順位通りだが、「ゲーム」(31.62%)、「ギャンブル」(29.91%)と続き、「3.4. 収入の使い道」の「趣味」の内訳で「ギャンブル」(特にパチスロ)が1位であった点を裏付ける形となった。2005年度から項目に加えた「酒を飲む」⁹⁾も、6位(23.81%)の高位置に付けている。

「その他」は、「バンド」(19歳男性)、「ツーリング」(20歳男性)、「釣り」(20歳男性)、「副業」(21歳男性)、「車いじり」(21歳男性)、「舞台練習」(23歳男性)、無記入1件の計7件であった。

4. 労働と生活の両面に関わるデータ

4-1. フリーターになった理由

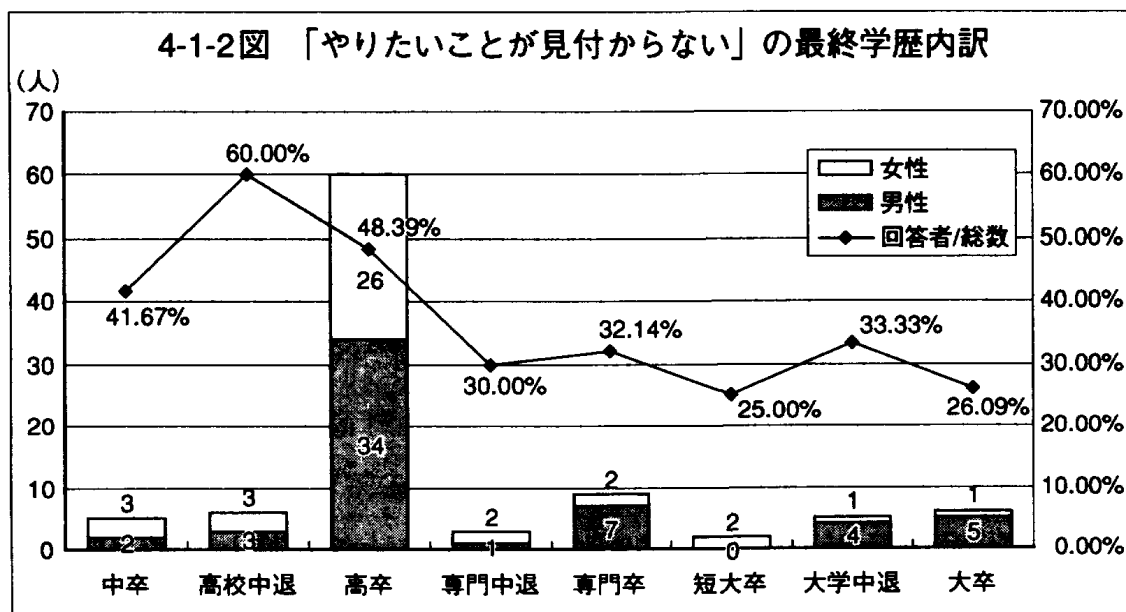
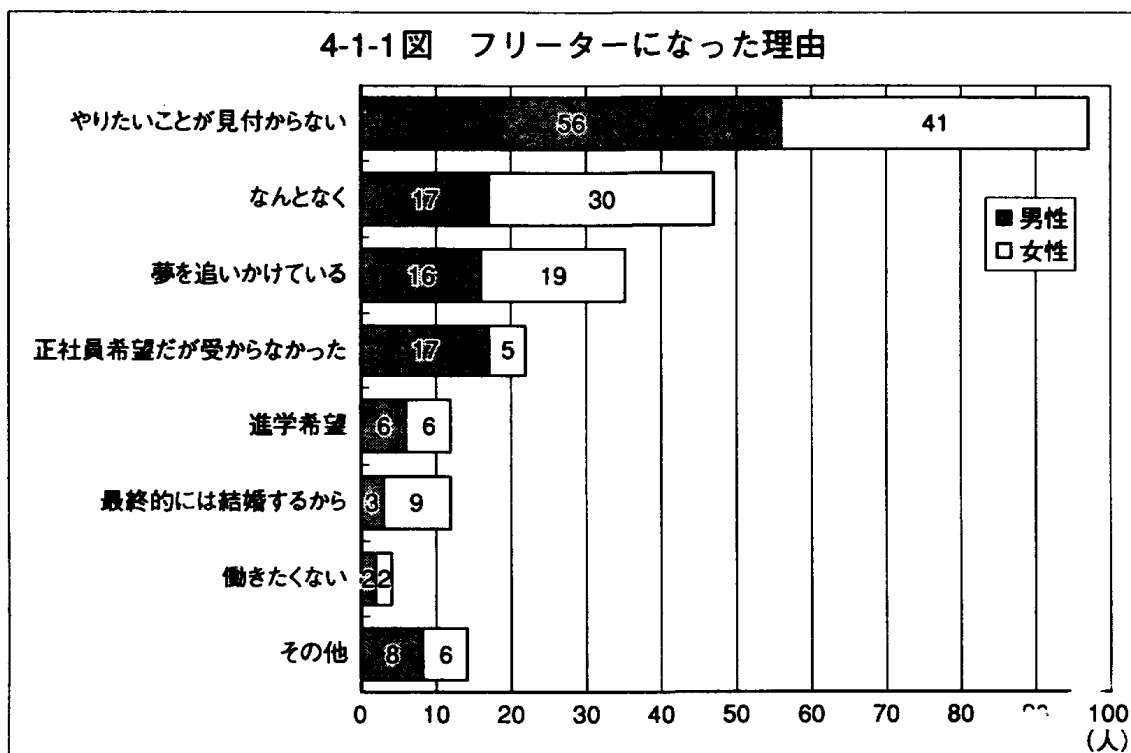
何故フリーターになったのか／フリーターを選んだのか(複数回答243

件、回答者実数225人）は、「やりたいことが見付からない」（全体43.11%、男性49.12%、女性36.94%）が断然トップで、2位が「なんとなく」（全体20.89%、男性14.91%、女性27.03%）、3位が「夢を追いかけている」（全体15.56%、男性14.04%、女性17.12%）の順となった。男性では「正社員希望だが受からなかった」も「なんとなく」と同率2位、女性では「最終的には結婚するから」が4位（8.11%）となった点が特徴的である。

「夢を追いかけている」の内訳¹⁰⁾は、歌手・役者・舞台俳優・ミュージシャン・バンド・ラッパーなどの芸能関係、声優・漫画家・イラストレーター・色彩コーディネーター・ネイリストなどの専門職、起業家・税理士・薬剤師・介護福祉士・美容師・車の整備士などの資格職と多岐に亘り、人の数だけ夢という名の『なりたい職業』を綴る必要があるので、ここでの詳述は割愛したい。

「その他」は、「離職・辞職」4件、「学校中退・退学」2件、「家の都合」2件、「フリーターの方が収入が良い」（21歳男性・月収32万円）、「今のパチンコ店で社員になろうか考えている」（22歳男性）、「会社から『3ヶ月で社員にする』と言われ、学校の紹介なので信じたらウソだった」（22歳女性・専門卒）、「革命」¹¹⁾（23歳男性）、無記入2件の計14件。

1位の「やりたいことが見付からない」は、2005年度調査に比べ5.86%上昇している。4-1-2図は、「やりたいことが見付からない」からフリーターになったという回答の最終学歴別内訳である。「高卒」が全体の61.86%に及ぶという実数は圧倒的である（2005年度57.69%）。だが、元々「高卒」フリーター率が高い（「3-3. 最終学歴」参照）ことを配慮し、最終学歴別全数に占める回答者数割合で見ても、「高校中退」60%（前回35%）、「高卒」48.39%（前回41.44%）、「中卒」41.67%（前回54.55%）の順である。前回も指摘したが、中学・高校を離れる際に「やりたいこと」を見付けられているかどうか、フリーターという身分を回避する分水嶺となる傾向が、より明確になったと言えよう。

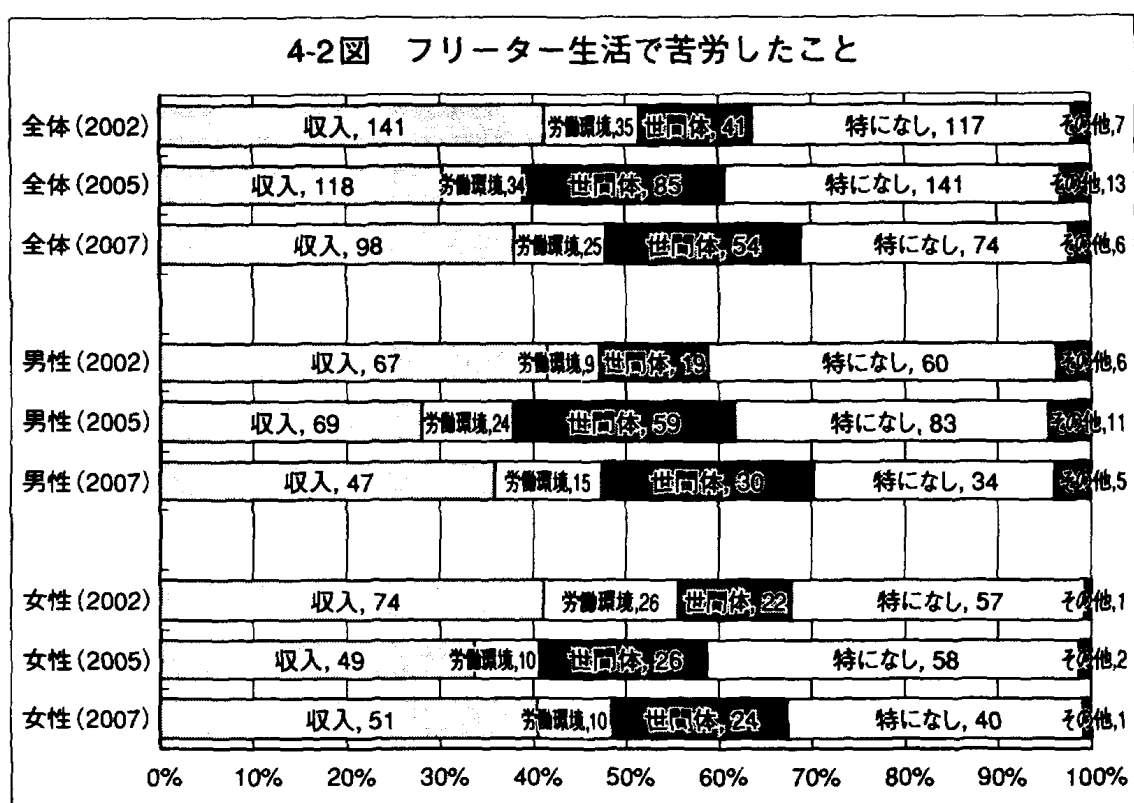


4-2. フリーター生活で苦労したこと

フリーター生活で苦労したこと（複数回答257件、回答者実数226人）は、1位が「収入」（43.36%）、2位が「特になし」（32.74%）と2002年度調査

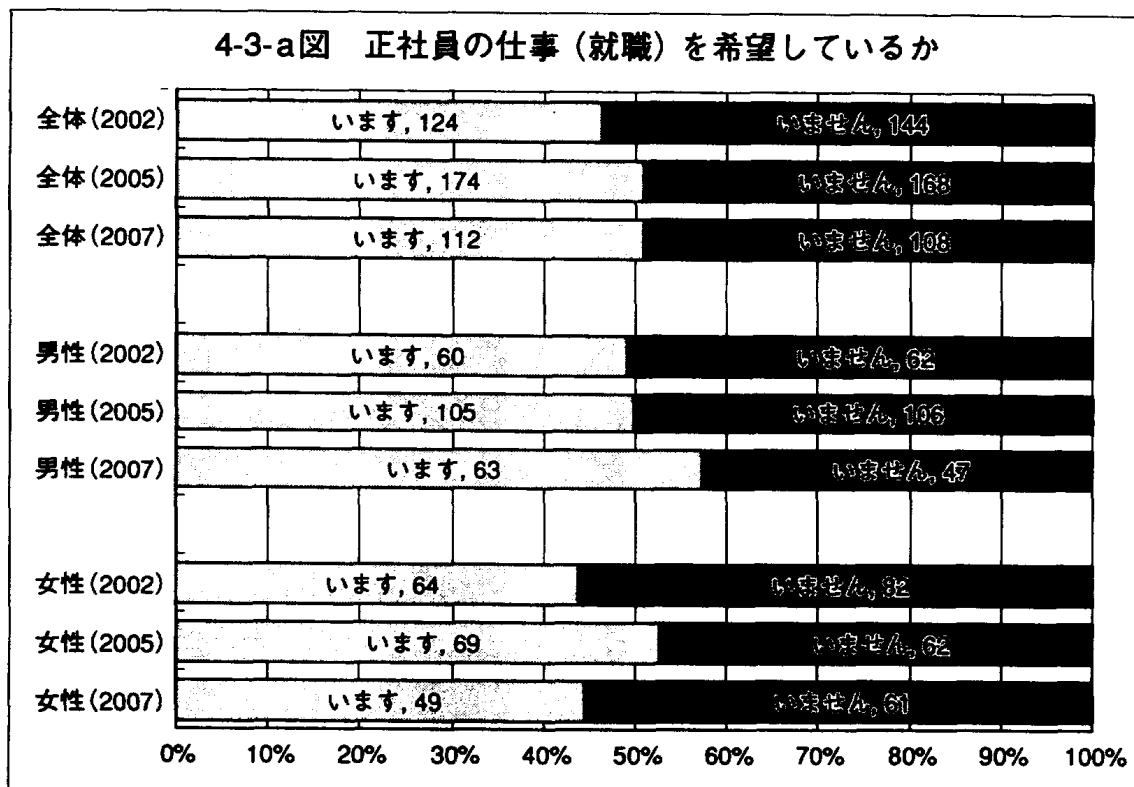
と同順に戻った。その原因は、2005年度調査に比べ「収入」増大と「特になし」減少による逆転であるが、「世間体」も23.89%と依然高い数値を示していることに留意が必要であろう。

「その他」は、「自分との葛藤」(20歳男性)、「親」(20歳男性・家族と同居・フリーター歴1年半)、「親の不満」(21歳男性・家族と同居・大学中退・フリーター歴1年2ヵ月)、「休日の変更」(21歳男性・パチンコホール・週7日×12時間)、「保険等」(22歳男性)、「ボーナスがない」(25歳女性)の6件。



4-3. フリーター生活の満足度

- a) 正社員の仕事(就職)を希望しているか(有効回答220人)は、「希望しています」(50.91%)が「希望していません」(49.09%)を上回った。女性の正社員希望は減少したが(43.84%→52.67%→44.55%)、その分を男性の正社員希望志向増加(49.18%→49.76%→57.27%)が

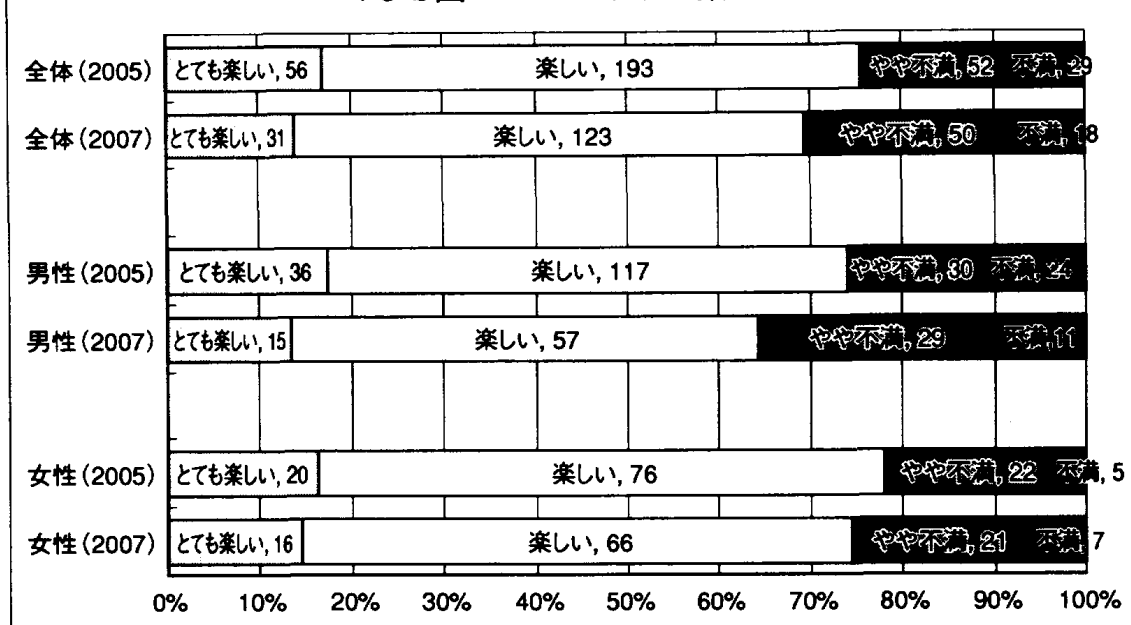


相殺する形となった。

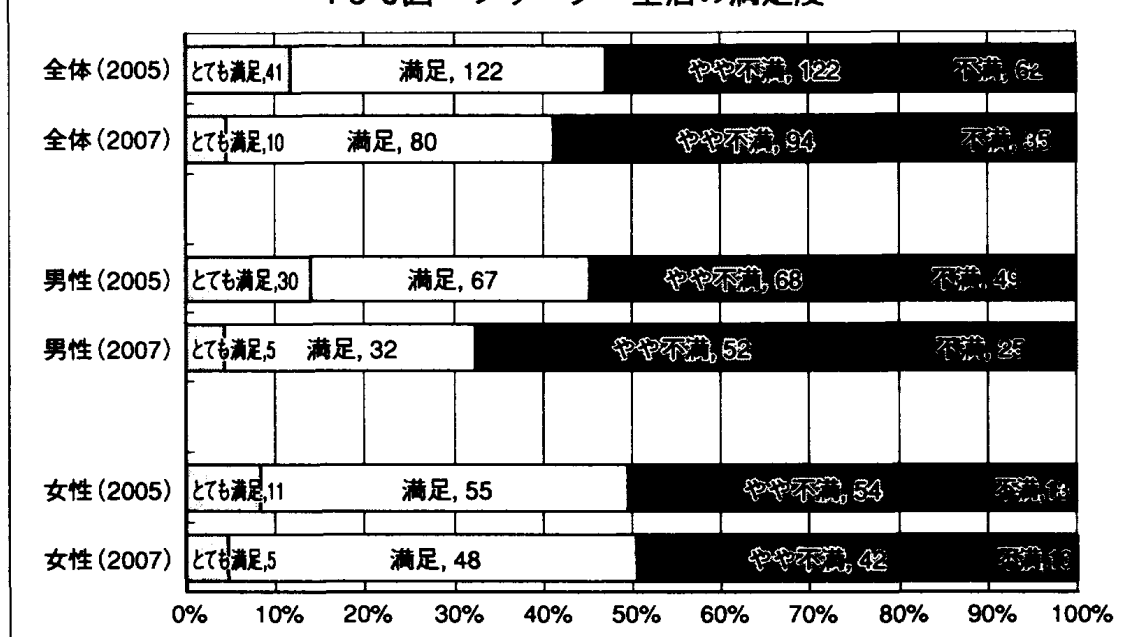
b) アルバイトの楽しさ（有効回答222人）は、「とても楽しい」と「楽しい」合わせて69.37%（男性の64.29%、女性の74.55%）を占めた。2005年度調査に比して、全ての数値で「不満」と「やや不満」の計が微増した（全体24.55%→30.63%、男性26.09%→35.71%、女性21.95%→25.45%）。

c) フリーター生活の満足度（有効回答219人）は、「やや不満」と「不満」の計が6割近くに上り、2005年度調査に比して5.88%増加した。特に、男性の「やや不満」と「不満」の計は67.54%と、前回調査を12.87%も上回った。過言を恐れず言及するなら、現状維持志向フリーターは、女性では半数ながら、男性では3割まで減少してきていると言えよう。

4-3-b図 アルバイトの楽しさ



4-3-c図 フリーター生活の満足度



労働条件面では、全数の7割近くが現在のアルバイトで充分満足しながらも、男性の正社員希望が6割近くに達し、過年度調査に比して不満割合が微増した。生活条件面では、「収入」面での苦労が増加し、「世間体」を

気にする割合も過年度に比して増加した。その結果、全数の6割が今のフリーター生活を不満に感じているという結果となった。

むすびに代えて

川崎「路上生活者」のヒアリング調査（1998年7月～8月）¹²⁾に始まる一連の貧困実態調査研究も、10年目を迎えようとしている。その間に、一部調査項目を更新しながら3回実施した「フリーター」調査結果を次頁にまとめてみたい。

総括的に見れば、3回の調査を通して基本的な数値に変化はないまま、フリーター自身が置かれている現状への「不満」が募ってきているように思われる。「高卒」後に「やりたいことが見付からない」まま、アルバイト歴・フリーター歴が長期化し、その中で男性では「正社員希望」が増加し、女性では「収入」面を重視しながら「貯金」割合が増加している。これらの傾向が、現在のフリーター生活を何とかしたい、脱却したいと願っての思考や行動のように思えてならない。

千葉県内のみならず、近年は都内（特に定時制高校）からの「出前授業」依頼が増えてきた。再三再四繰り返しではあるが、中学・高校在学中になりたい職業・叶えたい夢を見付け、いかにしてやる気を出させるかが一義である。しかし、身近にも大勢居て理解している筈のフリーターの現実を改めて「知る」ということも、将来進路としてのフリーターを回避する方法となると体験的に感じてきた。教育—とりわけ「知る」ということを通じて「心の貧困」が少しでも解決できるのなら幸いである。

末筆ながら、調査に協力頂いたフリーターの皆様、実際に調査に当たった37名の敬愛学生・卒業生諸君に、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

参考 「フリーター」アンケート調査結果の比較

	2002年度	2005年度	2007年度
平均年齢	21.4歳	22.2歳	21.9歳
平均労働日数	4.6日	4.7日	4.6日
平均実労働時間(日)	7時間24分	7時間40分	7時間26分
平均実労働時間(週)	－	36時間27分	34時間23分
労働時間帯ピーク	16:30～17:00	16:30～17:00	16:30～17:00
平均時給	936.69円	937.06円	967.71円
平均月収	142,683円(概算)	129,430円	127,217円
職場経験数/継続月数	4.3箇所/1年1ヵ月	4.0箇所/1年6ヵ月	3.3箇所/1年9ヵ月
家族との同居率	74.84%	77.55%	73.71%
フリーター歴	1年11ヵ月	2年7ヵ月	2年3ヵ月
最終学歴「高卒」割合	48.18%	50.23%	53.85%
収入の使い道	1. 携帯電話、2. 趣味 3. 交際費、4. 貯金	1. 携帯電話、2. 食費 3. 交際費、4. 趣味	1. 携帯電話、2. 食費 3. 交際費、4. 貯金
休日の過ごし方	1. 友人と会う、2. 買い物 3. 休養、4. デート	1. 買い物、2. 友人と会う 3. デート、4. 休養	1. 友人と会う、2. 買い物 3. 休養、4. デート
「やりたいことが見付からない」割合	－	37.25%	43.11%
正社員希望割合(男/女)	49.18%/43.84%	49.76%/52.67%	57.27%/44.55%
アルバイト先の満足度	－	75.45%	69.37%
生活の満足度	－	46.97%	41.10%

注

- 1) 第1回調査結果は、星真実「千葉県のフリーター（2002年6月～2003年7月）」（『経済文化研究所紀要』、敬愛大学、9号、2004年3月）を、第2回調査結果は、「千葉県のフリーター2005—アンケート調査報告（2007年5月～8月）」（『経済文化研究所紀要』、敬愛大学、11号、2006年5月）を参照されたい。
- 2) 千葉、西千葉、稲毛、津田沼、船橋、本八幡、市川（以上総武線）、佐倉、八街、成東、松尾、横芝、八日市場、旭、銚子（以上総武本線）、成田（成

田線)、五井、木更津(以上内房線)、茂原、上総一ノ宮、大原(以上外房線)、東金(東金線)、松戸、柏(以上常磐線)、南船橋、新浦安(以上京葉線)、八千代台、勝田台、志津、京成臼井(以上京成本線)、習志野、三咲(以上新京成線)、行徳(東京メトロ東西線)の各駅周辺で街頭調査と、各調査員の伝手によるアンケート回収を実施。過年度調査同様、アンケート拒否により成果のなかった調査実施駅周辺地域については記載していない。

- 3) 調査員は、荒木直人、石田昌宏、伊藤正隆、大木一久、小田亜莉紗、小宮山亮、齋藤篤志、渋谷将、真行寺貴仁、進藤良昌、杉山拓也、田島穰治、多辺田文矢、丹野慶太、津村耕平、唐朝、浪川祥宗、沼田めぐみ、長谷川智也、羽山貴史、藤田和也、渡邊敏志(以上当時3年ゼミ)、その他の調査協力学学生・卒業生に上地準、鶴塚亮平、大木崇正、加川昌裕、加藤健志、佐藤莉里子、品田恵祐、下山真毅、新藤修平、鈴木愛、高橋佳輔、玉村俊、中根智之、行木康佑、貫井直樹の計37名(50音順・敬称略)。
- 4) 調査員数減少や調査費0も響いたが、23歳調査員によれば、「うちの代はみんな派遣やバイトから正社に上がっちゃってる奴ばっかだから、フリーターは難しいんじゃない?」との話であった。全国のフリーター数減少も合わせ、今後は派遣社員・派遣アルバイトの調査も、不安定就業層を考察する上で、その重要度を増してきたように思われる。
- 5) 報告中の平均値は小数点以下第2位四捨五入、割合(%)は小数点以下第3位四捨五入とした。
- 6) 2005年度調査時からの変化として、旭市・海上町・飯岡町・干潟町は2005年7月1日付で旭市に、夷隅郡夷隅町・大原町・岬町は2005年12月5日付でいすみ市に、野栄町と八日市場市は2006年1月23日付で匝瑳市に、光町と横芝町は2006年3月27日付で横芝光町に合併した。
- 7) 「派遣」(男性2件・女性5件の計7件)という回答については、産業分類では「卸売・小売業」「飲食店・宿泊業」「サービス業」に、職業分類ではその全てに当てはまる可能性があり、集計からは除外した。また、「打ち子」(23歳女性)という回答も、法的に根拠ある雇用契約であるかという問題と、勤務地に「派遣」と記入されていたことも合わせて、集計からは除外した。
- 8) 掛持ちアルバイトは、雇用先毎に別時給としてカウントした。日給については、労働時間数で除した時給換算で可能な限り集計に加えた。
- 9) この項目に○を付した55件の内、17歳女性、18歳男性、19歳男性、19歳女性2人の計5件は未成年であるが、法的・道徳的問題は別にして集計には加算している。
- 10) 「夢を追いかけている」に○を付し、「就職」(22歳男性)、「一人暮らし」(20歳女性)と記入してくれた2人については、本人がそれを夢見ていることは理解できるが、世間一般の「夢」の概念とは異なると思われるため、集計からは除外した。

- 11) 回答直下に「自分も他者も含めて、能力向上と社会貢献を合わせた目を持つ人が少なすぎる。その問題と向きあえる基礎能力を養いたいため」と付記があった。革命の何たるかについては、本旨を逸脱するため言及を避けたい。
- 12) 調査結果については、星真実・小澤薫「現代の貧困と社会保障―川崎『路上生活者』の実態を踏まえて」(『中央大学経済研究所年報』、30号、2000年3月)を参照されたい。